

夏目とも子

「遠州横須賀 後藤邸 2024」 インスタレーション

材料／トレーシングペーパー・色鉛筆・水彩絵具・プラスチック段ボール・等辺アングル

後藤邸での作品展示は二年目となりました。

昨年、漆喰壁の透き通る青に感銘を受け、四角い形にとりどりの色を塗り部屋に並べました。

今年はその色の成分が立ち上がり、弾け、あるいは揺らめく空間にしたいと考えました。

紙の四角形を変えず、切り貼りをしない方法で立体を作るため

折り紙の技法を使うこと選んだのですが

幼い頃から折り紙がとても苦手だった私にとって

百単位で小さな立方体を折る行為は難航しました。

柔らかく薄いトレーシングペーパーは折り線を間違えると跡が残ってしまうし

力を入れすぎると、くしゃりと潰れてしまうので

最初の数十個は不格好で見れたものではありませんでした。

何日も作業を繰り返すうちに、角がピンと立った箱が生まれてきた頃には

折り順も身体に沁み込んで、いつのまにか苦行では無くなっていました。

静かな部屋の窓を開け、埃を払い、雑巾をかけ、清潔を保つこと。

日々の繰り返しの行為と、折り紙は少し似ているように思いました。

私にとってのインスタレーション表現は、

建物の姿やその姿になるまでに積み重ねた時間への想像から生まれます。

壁の青色が放つ空気、室内各所に見られる水平垂直の直線、その姿を保つために費やしたであろう時間。

後藤邸の簡潔で深い佇まいが今回の制作の泉源となっています。

四本の直線で平面を囲うと四角形ができ、四角い面が六個集まると六面体になります。

立方体、キューブ、どの名称もなんだかしっくりこなくて、良い呼び名を探しています。

仮に「四角い立体」と名付けて部屋に置きました。

故後藤夫妻が使われていた二本の杖を、今年もまた玄関に置かせて頂きます。

杖を触ると昨年の今頃を思い出します。

あの頃、杖を使ってゆっくり歩いていた私の父は車椅子が必要になりました。

いつかその車椅子も不要になるのでしょうか。

壁の落書き、それを消した跡、そこで誰かが生きて活動していた証の気配が残る家屋です。

今年も快くこの場所を解放して下さった後藤茂文氏に感謝致します。

夏目とも子

2024年10月25日

